

東北学院大学博物館

文化財レスキュー活動終了

今年6月末からスタートしていた石巻市鮎川地区における、文化財レスキューの最終便が東北学院大学博物館に到着し、足かけ4ヵ月続いた活動が無事に終了した。

6月下旬からスタートしていた東日本大震災に伴う津波で多大な被害を受けた沿岸部の文化施設から、考古学的資料や民俗資料などを救済しようという活動は、文部科学省・文化庁などの支援のもと各地で取り組まれてきた。本学の文学部歴史学科でも、東北学院大学博物館との連携で、石巻市・鮎川地区で被災した資料を現地から博物館に一時保管するという活動に取り組んできた。

歴史学科の政岡伸洋教授と加藤幸治准教授の指導のもと、本学の学生、ボランティアステーションの学生をはじめ、OBの皆さん、また上智大学など6大学の学生教職員も協働で臨み、スタート時からこの10月の最終クールまで、延べ550名が携った。

鮎川の牡鹿総合体育館や鮎川ホエールランドに一時保管されていた民俗資料、考古資料などを運び出す作業は4ヵ月にわたって継続された。



▲ 牡鹿半島の鮎川にある牡鹿総合支所に隣接する体育館から文化財を運び出した



作業は現地の資料や文化財を美術品輸送の特装車に積み込み、東北学院大学博物館まで運び、敷地内での洗浄作業と仕分け、そのあと収蔵施設に収納するというもの。

石巻市鮎川地区のレスキューは完了したが、今後、新たなミッションが始まるかもしれない。

